

2 回生 (24 代)

探 検 栗本 雅也

「探検」に関する八百字程度の作文を書け。」
こんな風に言われた時、僕は非常に困った。というのも探検部の一員でありながら今だかつて「探検とは何か」「探検の意義」などといった事柄について全く考えたことがないからだ。だから一体どんな事を書いて良いかよく解らない。既に書き終えた人の文章を読んでも抽象的で難解な言葉を多く並べているので頭がますます混乱してくる。探検、辞典で調べてみると、その意味は(未地の地域を実地にさぐり調べること)、(危険をおかして調査すること)と書いてある。そう、正にそのとおりだと思う。今、探検というものについて考えてみるとその言葉のイメージは幼い頃から今までずっと変わっていない。つまり命を賭けて自然に挑む、あるいは未開の地を調査するというイメージだ。それは辞典に印されてある意味と同じである。今まで登山家とかヨットマン、その他いろんな人達でいわゆる探検家とか冒険野郎とか言われてきた人間は多くいる。しかしそういう人達に対する僕の評価はこうであった。確かに山を登ったり川をくだったり未開の地を踏査したりするには高度な技術を要するであろうし何より勇気がいる。だが己の手で自らの命を危険にさらすことはないではないか、と。そんな事を思いながら探検部に入部した僕を待っていたのはいろんな合宿だった。合宿を重ねるうちに考えは変わった。合宿を通して今まで見えなかったものが姿を現わしたのだ。探検部の活動で何度か危険な目に会ったし、事実他の大学で死者が出るほどだ。しかし生命の危機以前に苦しいものがあった。合宿生活はいろんな面で不便だし苦しい。ましてや偉大なる探検家達の味わう不便さ、苦しさは並大抵のこ

とではないだろう。探検にはもちろん勇気や知識、技術などが必要だが、その過程でそうくうする苦難に耐え、目標を達しようとする根気と忍耐が大きな要因を占めるのではないだろうか。いかなる逆境にもめげない精神力——ぜひ養いたいものである。

探検について 幸徳 伸一

純粋に「探検」の定義を満足させるものは、もはや地球上には、有り得ないだろう。

これまでの歴史において、人間は、様々な形で、未知の追求に努力してきた。

あたかも、それは人類のロマンか何かのように——。現在、「探検」を我々の周囲から拾ってみても興味をひくものが少ない。

植村氏は、北極犬ゾリ踏査などの活躍で、探検家として並く世の中にアピールしたが、所詮、探検家と呼ばれる人種は、中世から近世までで、途絶えたのではなからうか？

いわゆる探検のプロフェッショナルが、低調なのだから、我々、学生探検部員にとって、そのことは、なおさらである。だが、それも、仕方ないことかもしれない。前述のように、人跡未踏の極地とか、他いろいろな探検の対象になるものは、極めて少ない。では、探検部活動を無味乾燥なものに、しない為には、どのような配慮が必要であらうか。

すべての活動において、基本的技術とその応用が必要である。そうして、その技術・知識を駆使して独自の活動分野を開拓するのである。イミテーション的な探検では、つまらない。その独自の開発の対象が、世界の辺境でも、国内の身近かな小さな範囲でも、同じことであって、要は、如何にして、僕人が能力を発揮できるかである。そうすれば、自ずから、新しいものが見つかるに違

いない。

自分の探検論は、抽象的理想像になってしまい、はっきり具体的に表記をすることができないが、これから、懸命の技術向上と、信念を持って合宿に取り組むことで、計画を成功に導きたい。

——成功は、なんのトリックもない——

ヨットに関する探検 寺西 昭

私が探検というものを最初に考えたのは、あれは去年の晩秋のころだったように記憶する。丁度あの時は、部会が多く、将来の展望をみつけるようにという先輩の御指導の下にいろいろ探検ということについて考えてみたものだった。その少し前まで、どこの班となく活動していた私であったが、ちょっと酒に酔ったはずみでヨット班に入班を希望してしまったので、ヨットについての探検ということ考えたのである。しかし、いろいろ考えたのであるがこの探検というものは、あるようでないようなものであるから、見る方向が変わればいろいろと、とれるように思われた。しかしヨットというものは、いまや全世界にひろまっているもので、単独太平洋横断、世界一周なんかは、とうに、やられてしまっているので大きな将来に向かっての展望が、なかなか見つからず、たいへん苦勞したものだった。私が1年のとき先輩が中国の揚子江を測る計画を立てられ、大変興味深く思い、実現に向けて努力してきた。しかし資料集めを進めると、揚子江の流速等、諸々の問題が起って来たため、計画は断念しなければならなくなった。また、先輩が卒業されるため、我々が中心になって、先の経験を生かして、新たな目標を探しているところである。当面は日本列島一周を目標とし、それを達成した後(2年後をメド)に、南方の島々でヨットを利用することが有利になる、ヨットを利用しなければならない様な踏査を行

たいと考えている。現在はまだトレーニングを重ねて技術を高める段階であるが、2年後には何とか成功させ、故郷に船を飾りたいものだ。

探検を考えて 蓮本 正俊

探検とはいったいどんなものであろうか。そして探検部とはどんな集りなのであろうか。未知なるものにあこがれ、好奇心や探求心を持ち行なう行動が探検でありその同志を求めて集ったものが探検部であるといつて良いものなのであろうか。考えれば考えるほど考えることが増え客観視すれば客観視するほど答えが単純に出てくる不思議な不思議なピーチパイ。

「地球は青かった！」と誰れかさんが言ったが探検の真髄はこの感嘆符にあるんじゃないかと僕は思う。「やった！」「ちかれた！」感嘆の言葉に終止符をつければ成功でも失敗でもどちらでもTAKE IT EASY。人生とは楽のあとに楽があり苦のあとに苦があるのかそれとも楽のあとに苦があって苦のあとに楽があるのかは知ったところではないが努力のあとには必ず感嘆符が待っている。不可能だから努力をしないでは感嘆符を求める行為を放棄しているのであって自分を偽っているのである。現在の探検部には自分への背信行為者が多い。何人の部員が自分の探検に満足して探検を続けているのだろうか。もう一度自分を見つめなおして探検部に幸あれ。

探検か旅か 水野 浩

最近、いろんな事をしているといろんな人と知り合いになります。その一人と(もう30すぎのオッサンなんです)酒を飲みながら話していると、

「君は、探検探検と言うてるけど、ほんまは旅にすぎんので。」と言われました。まあ、探検も

旅の一種である事は確かですけど疑問は残ります。

「ほんなら、×××しにヨロンや軽井沢に行くのと同じなんですか？」

「同じや、求めるものがちゃうけどな、その人らは×××を求めに、君は探検を求めに、又は探検とはなんぞやを求めに旅に出るんや。」

「ほんなら、同じ次元やと？」

「いや、次元とかそんな持ち出す事自体おかしいんや。本まもんの旅とはやな…… たとえばドラッグ(薬)やることトリップ言うやろ。そんでやな、そのトリップする事自体楽しんだらええわけやけどほんまもんのトリップとは(あっちの世界からこっちの世界へ)帰ってきてから、『いまのはいったい何であったのだろう。』と考える所から旅が始まるんや。ある人はその旅が一年やったり、又ある人は一生続くわけや。これを又の名を、フラッシュバックちゅうねんで水野君。」

何か話をはぐらかされたけど酔ってるから解らないままに強力な感動が残った。

今までぼくはそれなりに探検についての考えを持っていた。『人のやらない事をする、人の行かない所に行く事が探検であって、その人という意味によって探検の大きさが確定される。たとえば世界中の人が行った事がなければ世界的であるし、関大の人が行った事がなければ小さい探検だ。』というのがそれである。

しかし、ここに来てまた解らなくなった。ここからまたぼくの長い旅が始まるのではないだろうか、旅のための旅、或は旅による旅が……。

探検について 四元英夫

探検の定義について考えると、頭が混乱して幸徳よりパープリンになってしまう。

一口に探検といっても人それぞれ考え方が異なるため、その解釈のしかたで探検部での活動内容が

多種多様化している。しかし現在のはたして探検とよべるものが残っているかは疑問があるが、自分で探検と思えることがあれば、そのことをやっていけばいいと思う。

話は変わるが去年、現在の2回生で京都で合同コンパをやった時の話である。

5対5でやるはずだったのだが相手の方の一人が病気でこられなかったため5対4になってしまったのである。2次会でディスコに行ったのであるが12時をすぎたところで女の子がつかれてしまい一人づつ肩に手を回し休んでいたが、当然一人あまってしまう。そのかわいそうな役にA君が当たったのです。

その時のA君の言葉をあげてみると、

「幸徳、A定おこるから10分代ってくれ」

「蓮本、特アラおこるから5分ノ5分ノでいいから代ってくれ、おねがい〜」

このように聞くも涙、かたるも涙の物語が誕生したのです。

それいらい「寺ゴン」(A君の合ゴン)といえど世にも話さんなことのたとえ、とクラブ内で使われています。

このことが探検とどのような関係があるかは定かではありません。



未来は君達の双肩にかかっている。カイザー関大探検部ノ